

第 2 部

実 存

第 1 章

世界と超越的構造

現代科学の成果により、世界の、宇宙の、測り知れない、複雑で、入り組んだ、それでいて一貫性をもち、自己組織化し、自己整合化し、自己増殖し、ダイナミックに変移、創発するように思える仕組みと構造が、序々に明らかになってきている。

そして世界のトポロジー的な構造や、理論の双対性も明らかになりつつある。更に我々の抱く概念もある双対性を持っているようだ。

我々の思考形式も、存在物も、世界—地平の下での創発的性格が顕わになってきているのである。

このように我々が自己を含む世界に対して、宇宙に対して、そして自己自身に対して無疑問で、既知なものとして世界に対して抱いていた認識が大きく変わる変革期の只中にある、そういう時代に今いる様に思える。

そして世界は、存在物は、「存在」という人間のもつ悟性による認識の限界を超えた超越的な次元—形式のもとで、「現在」という地平—次元—形式の最前面で、限りなく、絶え間なく存在化、顕現化を行い、そして自律的に相互調整しながら自己組織化し、自己展開しているという、限りない創造の最中に在る。これらすべての事象は「存在」という、存在物すべてを統べている超越的—地平のもとでの事象である。

そして、すべての物と出来事と情報を含めた全事象は、「存在」の無限の属性を刻印された無限の属性と、超越的—意味をもっている。

まさに現実には、限りない奇跡がダイナミックに展開している様相を呈している。

驚くべきことだ。

そして我々はその創造の最前面の真っ只中にある。

最初の問い。

見方によっては世界は合目的世界に見えるが、それは錯覚なのではないのか。

実は、ある潜勢的な陰伏されたあるものの顕現化の表出結果ではないのか。
顕現化の為のロジック、情報、構造化情報・・・等々をまとめて顕現化情報による顕現による
無矛盾性があるのではないのか。

合目的性はその逆さの見方ではないのか。
その潜勢の顕現化の中に現存在も構造的に被投されているから無矛盾なのであり、合目的な
結果現象と写るのではないのか。

世界を無限に解明することは可能であろうが、そしてそれは常に包摂的なものに包含され
一般化され、汎化され、その中での近似になってゆけどうが、
だが創造することは、被造、被投され世界一内一存在である現存在には考えること自体に限界
あるいは矛盾があるのではないのか。

それらの問いに対する答えは、もう何千年も前からあるが、どれをとっても根本的に納得できる
だろうか。

とにかく、生物のひとつ、例えば道端に生えている一つの小さな草でも、無限に精妙で表現不能な
活動をして生きている。
我々人間の考え、思考、概念の次元を超えた営みをしているようだ。

多くの宇宙があり、その各々の宇宙は真空の量子揺らぎのランドスケープからのトンネル効果から
発生するとなると、一宇宙内の全ては同じ情報を共有している情報体と表現できる。

非局所性、一貫性に対する無矛盾な説明ができる。
多くの宇宙発生論の中の一つであるビレンケンやエヴェレットの解釈は当を得てはいないか。

無から有への転移、顕在において構造化が発現する。

それらの顕在化現象の世界であるこの宇宙を超えた根元的なものがあるはずである。

有化した全てのものを貫通しているある包括的な、あるものがあるはずである。

- ※ 以降において”現存在”という言葉が出てくるが、これはハイデッガーが人間につけた呼び名、Dasein(現存在)の意味で使っている。
これは、人間とは何かを既に知っているという憶測を避けるためである。

9 - 115

認識における限界と超越性

斯様に、斯様な存在として、現存在として、斯様な機能を付与され、斯様な悟性を付与されて、この次元に発現している現存在が現存在自身を把握、認識するということ。

そしてこの次元以外の次元を考え得るということ。

付与された機能の範囲内で、現存在自身、他者(現存在以外)を認識しているということ。

そのこと自体を識っているということ。

これらは全て、この次元内での思惟、悟性認識であるということ。

”何故、斯く在るか”と疑えること。

”何故、かくもこの複雑な、カオスと秩序が斯くも精妙に調整され協調された世界であるか、何故かくもこの自己存在もが、斯くも複雑かつ精妙な肉体に見えているのか”と問えること。

ただ、それらの問いに対する回答は、現存在自身がこの次元の斯様な構造の中に織り込まれている為、悟性により得る限界があるのである。

斯く問えるということは、これらの限界を識っているということは、この次元を含めた、この次元を包含した次元を意識できるということを暗に証明していることであり、現存在は超越的であるということである。現存在は超越的次元から発現していることの所以である。

現存在は存在を問い得ることができる存在である。

同時にこの存在に、その存在という構造に完全に全てを組み込まれている存在である。

そしてこのことを意識でき得る存在である。

よって、意識は超越的、脱自的存在である。この意識とは即ち現存在である。

超越的意識は、あらゆるもの、ことに、疑問、何故に・・・を呈することができる。

超越者という”対象”を必要とせず、この次元、この構造、これらを意識するという、意識できるということが、超越そのものであり、ある客観的对象を必要としない。

言うなれば超越者は存在しない、存在自体としてその存在次元と、包括的全体そのものが、超越者そのものであるからである。

もの と こと。

9 - 116

根本的問題は、

1. 何故、斯様な形態で出生したのか、するのか。
2. 何故に、これ以外ではなく、あくまで斯様に世界はあるのか。
3. 人間からは認識され得ず、意識の対象となり得ず、存在し続けているものがあり得るのだろうか。
4. 何故、斯様に時間と空間の中で生き、そして意識しているのだろうか。
5. 何故、存在が有るのだろうか。
6. 何故、存在は無くはなく有るのだろうか。
7. 何故、自己をまた自己以外を対象として意識できるのだろうか。
8. あらゆるものは、どこから生まれ、どこへゆくのだろうか。
9. あらゆる生き物は、どこから生まれどこへゆくのだろうか。
10. あらゆるものや生き物は、何故存在するのだろうか。
11. 何故、階層性(占有空間の大小による)があるのだろうか。
クオーク ⇒ 生物 ⇒ 宇宙
12. 空間とは何なのか、どこから発生するのか、何故あるのか。
13. 時間とは何なのか、何故あるのか。
14. 何故、宇宙は斯様な構造としてあるのか。

これらに対して満足せる回答が得られるだろうか。

ある次元からこの次元に発現せしめられ、斯くあるべくして、あらしめられている。

つまり指令されているということ以外には答えられない。

ではその次元と、この次元は何故にあるのかという問いが残る。

存在に対する問いには答えられない限界がある。

存在以外に対しては、如何様にも詳細に叙述でき得る。

人間のなし得ることは、あくまで叙述である。科学することは叙述である。

これらの根源的問いを持ちながら、存在を意識し、この構造を俯瞰し、眼を見開いて主観、客観を超えて観入ることが出来ることは、人間のなし得る最高の歓喜であり、芸術であり、叡智であり、次元とこの世界を突破し超えている。

9 - 126

こういう状態は表現できない。ただし思惟する為の条件付けだけはできる。
何が構造としてあるのかを、まず意識できるかが問題だ。

1. すべては閉じた系の中で起きている。
2. 閉じた系の中では、時空、物質、エネルギー、etc・・・を発現する元(根拠)を与えるもの(ものとは言えないもの)に満たされ浸透させられている。
3. その根拠から発現した時空、エネルギー、物質からなる次元の世界は、非局所性、一貫性(コヒーレンス)を顕現している。
4. この閉じた系においては発現されているすべてが、同一の存在根拠を帯びている。
5. 発現する(させる)情報階層があることを示している。
6. 存在を満たしている(付与している)ものと、満たされている(付与されている)ものとは常に発現(生成)、消滅の世界を演じている。
7. 閉じた系においては、境界と内部は意識できるが、境界の外は意識できない。認識できない。
8. この閉じた系自体は(も?)、その存在根拠を持っている、継承根拠がある。
9. 次元自体も背景非依存から言えばある深層根拠からの派生である。
10. 閉じた系において発現している、時空、エネルギー、物質、情報からこれらの系譜が更に発現している。
 仮想粒子ボゾン—粒子フェルミオン—クォーク—バリオン—原子核—原子—分子—高分子—DNA—細胞—生命組織—器官—生物—惑星—恒星系—銀河—銀河系—銀河団—グレートウォール・・・が、瞬間瞬間に、階層構造の中の上下階層・水平階層の連係、情報連係の中で、発生、協調、共鳴、増殖、死、の循環をくり返している。
11. この閉じた系、次元においては、静ということはありません。
 生死を含んだ巨大な生成・消滅の渦の中である。
12. この閉じた系、次元においては、意識、気づきがすべての存在に、根拠から付与されている。
13. 閉じた系において、閉じている(内)、外、境界、などのトポロジーを意識できる、ある次元生命体が存在する。
14. 存在、無を問う意志体、ある次元生命体が存在する。
15. 今、ここにいる私という個は、100億光年先にある、ある1個の物質を瞬時に意識可能である。

すべてが、表現不能な驚くべき叡智と創造の奇跡の中で、歓喜と充足の中で、舞っている。

9 - 127

存在と無と境界。

存在驚愕と共にいつも現れる根元的な疑問がわいてくる。
「なぜ他ではなく、かく此様にあるのか。」

これは、他の常数、構造を持った宇宙が存在する、
または発現、顕在可能であることを示唆している、ことを意識は意識の内奥で知っていることなのではないか。

真空の相転移、マルチバース、.....

☆ 現時点での私の考え。 ☆
(今後の科学的成果により、多くが判明していくと思われる)

- ・顕現前においては、次元情報、時空情報、構造化情報は縮退しており、超対称性の状態である。
- ・顕現において縮退が解け、対称性の破れと、相転移が進行する。
- ・つまり潜在(無?)は超対称性状態であり、顕在では対称性が破れている。
- ・そして量子トンネル効果により、真空のランドスケープからの発現が起きる。
縮退が解かれ、対称性の破れが発生する。
- ・顕現化の過程において各々のミニバース宇宙において相転移が起き次元、構造、宇宙常数が表出し、
ミニバース毎に凝縮していく。
- ・対称性の破れによる相転移が起き、相転移は相転移欠陥が発生する。
- ・次元、時空の相転移が発生する。これは超対称性からの自発的対称性の破れ。
- ・次元は相転移し、その相転移欠陥として残るのがコンパクト化された次元。
- ・時空は相転移し、その相転移欠陥としてドメインウォール、テクスチャー、宇宙ひもになる。
- ・時空の対称性の破れにより時間が発生し、不可逆性が発現する。
- ・そして次元の相転移そのものがエネルギーと称される概念ではないか。
- ・縮退化されている構造化情報の対称性の破れにより、構造化、凝縮が発生する。
- ・この発生の仕方から考えて非局所性、一貫性は当然のことである。

10-010

「世界—内—存在」に関して。

世界—内—存在、の「内」は世界は空間の有る限りが世界という意味であるが、物質である我々はつまりクオークとレプトンからなる我々は、ブレーン上に束縛された存在物であり、バルク時空、又は高次元時空から見ると規定次元の表面に住まう物でもある。

空間—内—存在としては、ブレーン上での3次元空間内という意味である。ただし現存在は時間—内—存在としての生成中の動的過程の中に在る存在であるから、4次元時空—内—存在であると同時に、高次元から見れば表面—内—存在でもある。

ハイデッガーは空間は世界の内部にのみ有る、と実に常識的にS・Zのなかで断定している。彼の哲学のすべてはそこから展開しているのか？物質と空間が有る圏域を「世界」と言っているのか？この宇宙は11次元バルク内でのブレーンであり、ブレーン内での空間の膨張は「世界」の膨張？

次元には多層関係、包含関係がある。内、外、表面(境界)の多層構造がある。

物理的に言えば、重力が重力子が動ける自由度の範囲がバルク。

では空間は重力の自由度の限界まで有るということか？

重力子の有る所に空間が有る？

ではその外は？

外は無の世界。と言うよりは世界自体が無い。即ち外は無い。

外が有ると推論してしまう事自体が神秘そのものである。

現代物理から言えば、重力がある圏域が世界ということになる。だが「世界以外は無」、ということの根源的な問いには答えられない。

別風に言えば、情報が有る所が世界、と言えるかもしれない。

ここでいう情報は「関連」、「関係」としての相互関係が存する圏域が世界であると言っている。

関係が有ることのみ存在がある。

関係とは、相互作用があること、また相互作用がなくとも構造上の関係が存在すること。

ラズロ流の解釈では、「相互作用の無いものはない。すべては背景である量子真空を介して相互作用している。」と言う所だろう。

つまり世界とはそういうことだ。

例えば、ループ量子重力理論のように空間・非依存の量子重力の理論が進んでいるが、そうなると世界—内—存在としての現存在の規定の仕方(ハイデッガー)は、空間—内—存在でもなく、関係—内—存在、情報—内—存在ということになる。

ハイデッガーの”空間は世界の内部でのみ発見され得る”(S・Z)は変わっていかねばならない。そもそも私は、「空間というものは無い、そういう概念は、汎化された概念の中の特殊な状態である。」と思っている。

時間—内—存在、も無い。そもそも時間は、状態遷移の脳内での因果過程の関係認識概念であると思っている。

今という瞬間は、因果過程を断ち切り、生成の過程を何の憶測もなく見入ること、そういう意識状態のことである。

因果関係が無いように見える。生成そのものを観照する。そこには時間は無いわけであり、ハイデッガーがいみじくも言う”脱自的時性の地平的統一に基づきつつ世界は超越的にある”

この通りであろう。

だから存在の地平的構図が超越そのものが生成し得る場である。

存在は超越的構造そのものである。超越的地平そのものである。

まさにその瞬間において己は超越的構造そのものであり、それ以外のすべてもそうである。

以下の問いが残る。

- ・有るものが世界—内—存在として内世界的に出合うということ、そして互いに対象として客観化されて出合うということ、これは何を意味するのか？

- ・世界—内—存在としての”内”として意識されるこの情態性は何を意味するのか？

- ・”外”は存在しないとは何を意味するのか？

境界面ではいけないのか？内—外の構造は境界で？？？？される？

内、外という空間化はどこからくるのか。

我々は、外界の様々なことを空間化して考える。

幾何学が現代の宇宙論、量子位相幾何学、・・・等々において重要な位置を占めている。

- ・存在という構造地平、すべてはその”もと”にあるという意識はどこから来るのか？

ハイデッガーへの疑問。

積極的な言明ができる確信を果たして持っているのか？ 自己無矛盾、整合性を求める為に、簡潔に表現できない為に造語している。あるいは複雑に表現しているという感を持つのである。例えば、時性のある特有な時熟。この時熟の造語によって何を表現しているのか？ その底意を表に出さない。底意が見えないから逆に深遠な造語に見えてくる。こういう事が、ハイデッガーの著作の中で頻繁に見られる。

確信が持てない自己の言明を補うのがギリシャ語の語源解釈なのか？ 自分の確信があるなら自分の言葉で語る。

深みが有りそうに見えるが、その論旨をよく読んでみながら注意して進んでいくと、そこには何も言うべきことがない、つまり元々いわゆる常識的であり何か新奇的、創造的思索が結果して実を結んでいないのに気付くのだ。特にS・Zにおいては顕著だ。

世界－内－存在、と言うが、「外」が有るとして出て来る造語だ。果たして「外」はそもそも有ると言い得るのか？

存在の地平以外に存在は有り得るのか？

ハイデッガー自身が語る”存在の唯一性”からそれは矛盾である。

歴史の実存性の覚醒と決意性に情態的に寄与はしているが……。

ヤスパースはハイデッガーのこれらの問題をすべて掌握しそれを包括的に自覚しており、その上で自己の哲学を既に展開しているように私には受けとめられる。

実存の覚醒の媒介にはなるが、明確な決意性には欠ける。

ハンス・ザーナーの”ハイデッガーとの対決”を以前よりよく読むようになった。それはS・Zその他の著作に対するあるものを感じるからだろう。長年の呪縛から解放されるような感じを受けている。そこには、最近私が懸念していることがヤスパースの立場から語られているからだ。

10-011

私はヤスパースの晩年の著作「哲学的根本知もしくは包越者の諸様態の哲学」の中にヤスパースの哲学が集約されていると考えており、そのなかで共鳴し同意できる内容を以下に一部を列挙する。

a. 包越者の諸様態。

- ・意識とは主観と客観の分裂という根本現象である。
- ・…「我思う」と言うときの主観は対象に向けられており、対象に向かいながら自己意識という形で己自身に関係している。実存の場合にはこれと同じではあるがもっと深い構造がある。すなわち、実存は自己であるが、この自己とは己自身に関係しかつその関係において、己がそれによって措定されている方に己が関係付けられていることを知っているような自己である。
- ・実存は己がそれによって贈与されていると知っているところの超越者なしにはありえぬような自由である。…実存は超越者なしにはありえない。このことはいわば実存の構造をなすものであって、この構造は意識一般や精神の空間で超越者がどのように表象され思考されようとそうしたことには関わりをもたない。
- ・「固体」は言い表しがたい。ということは実存と眼前の個物との両方に通用する。…、実存は単なる事象過程ではなく世界の事象過程とは違ったところに由来する根源であって、その根源が世界で現象するようになるのである。
- ・実存の現実性は認識にとっては根拠付けられないものである。
- ・存在それ自身である包越者はいかなる仕方においても我々にとっての客体となることのない存在でもある。
- ・我々はこの世界の中をあらゆる方向に進んでいき、この世界のなかで認識できる事物を際限なく見出していき。しかし全体としての世界そのものは理解できないしそれにふさわしい仕方でも思惟することもできない。つまり世界そのものは我々の知の対象ではなく研究のための課題としての理念であるにすぎない。

b. 根本知のあり方についての考察。

- ・我々は対象的なものという形で包越者を思惟せざるを得ないが対象としては包越者は消滅する。
- ・包越的な存在の側からすれば我々がそれであるところのあり方が包越され我々がそれであるところの包越者によっては存在が包越されるのである。包越者が相互に包越しあうさま。
- ・包越者を描き出していく思惟は我々がそこに存在している存在のなかで、またその存在の現前している諸様態に従って我々を確認していくための一つの道具であるに過ぎない。…道具である以上完結したものではない。
- ・包越者の諸様態を描き出す場合の我々は、客観的に出現しているものの範疇によって存在者の諸段階を求めるのではなく包越者の諸々の空間を求めるのである。すなわち我々は存在の成層構造ではなく主客関係の諸根源を求めるのであり、対象的な規定をもった一つの世界を存在論的に求めるのではなく、主体と客体がそこから発現し両者が一体となって共にかつ互いに関連しあうものの根源を包越者存在論的に求めるのである。

c. 理性

- ・包括者を描き出してゆく思惟は、我々がそこに存在している存在の中で、またその存在の現前にいる諸様態に従って、我々を認識してゆくための一つの道具であるに過ぎない。
- ・包括者の諸様態に関しては、全体が非封鎖的であるということ、一なる全体という問題が我々の認識にとっては解決できない問題であることが理解される。

e. 思惟の転換。

- ・…かくして、世界、人間、神、存在という巨大な図式(宇宙論、神学、存在論という哲学の諸分野で扱われたもの)は、確かに根源的に喪失されがたい真理を含んではいる。しかしそれが完結した客観的な姿をとるとき、その内実は「論理的構造をもった見せかけの知」のなかで、生気のない概念性のために喪失されてしまう。
- ・…哲学的思考の客観的な即物性は、意識一般を超えて、思惟する者の実存と結びあっており、包越者のすべての様態の中での思惟の経験と結び合っているのである、と。

g. 内在から超在への飛躍

- ・”われわれ人間は………可能の実存としては、世界の外にある根源を持っている”
 <--- (私) ウィットゲンシュタインの論考にも似た表現がある。
- ・”世界はそれ自身に基づいて理解できるものではない。もしこうした総体性の統一体であるとすれば世界こそ存在そのものとなり、世界の他には何も存在していない事になるであろう。”
 <--- (私) 世界は存在そのものではない。世界は多の中の一、マルチバースの中の一ユニバースであること。存在はマルチバースすべてであることと同意、同じ概念。
- ・”科学的に確認される世界は地盤のないものである。このことを洞察することによって、はじめて思惟には実存の自由の為の空間が開かれ、実存には世界から超越者への己の飛躍の可能性の意識が生まれるのである。”
 <--- (私) ウィットゲンシュタインの論考 6.4312と似ている。
- ・”この飛躍は重大な結果を伴うのであって、即ち我々を閉じ込め世界を局限する恐れのある、あらゆる世界像や世界の枠を突破してゆくからである。”
- ・”我々人間は、人間の実在における現存在としては、完全に世界に由来するものであるにも拘らず、可能の実存としては、世界の「外」に或る根源を持っている。
 <--- (私) ウィットゲンシュタインの論考 6.41、6.4312 に相通じるものがある。

6.41 「世界の意義は世界の外に存在しなければならない。世界の中では全てはあるようにあり、全ては起こるように起こる。世界の中には如何なる価値もない、かりに存在したとしてもそれは無価値であろう。価値のある価値が存在するのならば………それは一切の出来事や状態の外にあるのでなければならぬ。………それは世界の外に在るのでなければならぬ。」

6.4312

「……時間、空間の中の生に絡む謎の解決は時空の外にあるのである。
 (解決されるべき問題は自然科学のそれではないのだ。)」

- ・”世界総体についての見方はすべて誤りであることが看破される。
 それらはすべて特定の遠近法で見られた相貌という性格を持っている。………
 世界総体に関する支配的な理論は、我々の洞察から見れば崩壊する。”
- h. 一なる真理への倒錯の防止
1. ”我々が「どこに存在し」且つ「いかに存在しているか」という問題を自己確定しようとする試みは、それ自身が既に哲学であるという訳ではない。なぜならこうした試みは、真理の諸々の内実を展開するものではなく、真理が現前してくる際の「形式」と「方向」を展開するに過ぎないからである。”
 <--- (私) ハイデッガーへの反論のようにも思える。
 - ・”最も深い熟慮による全体的自己確認といえども、再び疑問とされ、ただ当面の図式としてのみ確定されるのである。それは科学と同様に運動の過程にあるのであって、教義的なものとなる場合には真理としては没落してゆく。”

i. 懐疑主義に陥るのであろうか。

- …実在を把握可能な仕方最終的に眼前に所有していると思っっている限りにおいて成立しているところの我々の自然的な存在意識の安定性は止揚される。この確認は我々の通常の生の地盤を取り去ってしまう。
- …主客分裂を我々に意識させる、こうした確認によって、主客分裂に捉われている我々はいわば解放されることができる。
- …思惟された自我のあらゆる形式が我々の本来的自己の姿ではないということ認識せしめることによって、そうした自我に拘束されている我々を解きゆるめる。
 主客分裂を確認することによって、我々はこの分裂のうちに留まりながらもそれを超えて飛翔するのである。
- …そしてこの哲学するということが含む意義は、解放された己の地盤に定位しつつ本来的真理を目指して浮動状態を保つことを我々に要求するのである。

10-014 ニーチェ。
ニーチェの確執と鋭い洞察の混在。

まず、“権力への意志”の視点から多くを展開している。だがそれは全体の一側面であり、何ゆえに、その面のみを強調するのか。

- I. 認識としての権力への意志。
- II. 自然における権力への意志。
- III. 社会および個人としての権力への意志。
- IV. 芸術としての権力への意志。

以上、“権力への意志”のなかの第三書、“新しい価値定立の原理”において特に私が関心を寄せるニーチェの思想が見てとれる。

私にとって関心があるのは、認識における権力への意志、と自然における権力への意志であり、第四書“訓育と育成”で述べている内容である。

現代においても意味を持っている思想、あるいは新たに考え直す場に持ち出すべき概念に言及しているものも多い。現代のパラダイムに通じる概念も多く、掘り尽くせない鉱脈のごとき感はある。

私にとって興味があるのは、生物学、自然、宇宙に関して言及している部分に対して、その真贋を見極める必要があるというところだ。

ほかに思想家に対して言及している部分、カント、デカルト、スピノザ、パスカル、プラトン、ソクラテス、…、彼らにたいして幼稚ということと断定しているこの根拠と彼の思惟との関係も興味をそそる。

ニーチェの分析は或る核心を突いている。私は23歳で一旦棚上げにしたが、それは自分で関与し担うにはあまりにこの思想家は錯綜していると感じたからだ。そして提起している問題は私の若さでは担いきれないと判断したためであった。一旦まずニーチェに関してはかなぐり捨てた。ニーチェと対峙するには時間が必要だった。あれから40年、再びようやく向き合い始めた。そしてようやく見えはじめてはいる。

ニーチェは人間が関係するあらゆる領域に及んでいる。人間、生物界、宇宙、認識、心理、対宗教、対心理、対哲学、対思想家、歴史、……。ニーチェはヨーロッパの出来事ではない、人種の出来事ではない、人間の、地球の出来事であったし、今もそうである。人間へのリトマス試験紙である。

どちらにしても、ニーチェは現在においてもその鋭い洞察は有効だ。ぜんぜん賞味期限は来ていない。現代においてもその意味するところは強烈だ。むしろ時代とともに生彩を放っている部分もある。

但し、極端に偏向している部分がある思想であることも事実である。全体的雰囲気としては否定的な暗さは否めない。それは全著作の底流に流れている。

それほどに宗教からの呪縛は大きいのかと改めて感じる。

宗教は自己欺瞞と思考停止の最たるものの証左である。

内容は多くの重要な問題提起をしていて、時代の変り目の先鋭であったのであろうが、古い過去の宗教や哲学、芸術への果てしない批判と攻撃に溢れている。

最後には、その余りの攻撃性と独善性に疲れ果てて、追従することに抵抗を感じる場合が多々起こってくる。私の場合は、この思想家を納得するため追従するために費した精神力と成果に疑問を感じたため、一旦棚上げにした。そして40数年が経過した。

今思うに、ニーチェ本人は、本当に存在の超越的な喜びを体感したことはあったのだろうか。

私の場合は、このことが人間をみる場合の条件ではある。

ニーチェは例えれば、ダイヤモンドと毒物からできた鉱物のようなもので、ダイヤモンドは注意深く取り出さないと危険だ。そのときダイヤモンドだけを取り出すには毒物は多少くっついてくるものだ。

取り出すには毒に多少とも触っていることに気付かないといけない。毒もダイヤモンドと思いつんでる輩が多い、特に偏執狂的な者に多い。こうなるともう一種の宗教である。

きのこの選別と同じで、やはりその分野の経験と見識、更には相応の直観が必要になる。

彼は、時代環境が生んだ、時代の変り目における思想家か。……………

ヤスパースの“ニーチェ”、およびハイデッガーの“ニーチェ”は、彼らのニーチェに対する立ち位置を表現しており、興味深い。

たとえば、ヤスパースの“主観—客観—分裂”は、ニーチェの“権力への意志”の“新しい価値定立の原理”からの影響を受けているように見受けられる。彼ら二人はニーチェから多くの影響を受けており、少なからず彼らの源流に流れているが、独自の展開がなされた。

“権力への意志”においては独自の人間観、世界観、宇宙観が展開されているのはまぎれもない事実である。思想におけるパラダイムの転換が既に行われていて、違う側面、異なる次元からの現実的宇宙を解釈している。題名の通り、新しい価値定立の原理、である。

”権力への意志”という言葉から連想するのは、多分に歴史的にもダーウインの影響を受けているのでは、と思わせるところがある。突然変異、種の保存、自然淘汰などによる進化、または超人という言葉に表れている。しかしダーウイン主義を包摂している、批判している展開がある。反ダーウイン主義。684, 685。ところで、ダーウイン、反ダーウイン主義は既にほころび始めているというのが現代での評価であり、そういう面では時代に先んじていたといえる。

ニーチェ自らが”権力の意志”とは何を意味するかを書いている。

617

生成に存在の性格を刻印をすること—これが権力への最高の意志である。

……すべてのものが回帰するということは生成の世界の存在の世界への極限的の近接である。

635

……権力の意志は、存在でもなく、生成でもなく、パトスであり—生成が、結果を引き起こす働きが、そこから始めて生ずる最も基本的な事実である。

693

存在の最も内なる本質が権力の意志であり、……

弱肉強食と淘汰の世界としての権力の意志を語っているわけではない。これはエネルギーの衝動、傾向性、発現、生成への衝動を表現した造語であろうと思われる。

私にとって関心があるのは、その認識論にある。宗教や道徳、歴史文化論、芸術……等にかんしては触れたくない。

科学全般に対する認識論に関しては意味するところが多い。科学的手法の科学そのものの限界に関しても同様である。

10-016

ニーチェと科学。

人間社会の人間の営み、社会通念、習慣、因習・・・などは、この現実の”存在”の地平においては全くもって稚拙な些細なことである。それはすべてを貫いて圧倒的であり、人間の生はそれへの意識に消費されるべきである。現実の一片が存在をそのまま顕現、反映している。人間生物はその一部をその感官機能で垣間見ているのみである。世界定位には限りはないが存在の構図・地平を意識することはできる。存在の構図・地平のなかで生成、消滅、流転を繰り返す、ニーチェの語るあの世界である。

要は、人間の概念や意識、認識は人間の感官機能、機構の制約の外挿であるということである。そして、主観と客観の境界は明確ではないということ、価値観は人間生物としての種の保存、また快、不快によるところが大きいということ、外界、宇宙を仮構された概念で見ているということ、科学という手法では存在は捉え得ないということ、人間仕様の外界、宇宙、内界、自己を見ているということ、認識には限界があるということ、人間生物も含めすべての底流に流れている或る衝動の地平、すべてにおいてこの衝動の意志とみまがう地平で展開され生成されているということ、つまり今までの価値観、常識、因襲のしほりから脱却しなければ、人間特有の概念に着色されていない事実世界は見えないということ、人間のもつ概念を根本から疑い、新しく定位しなければいけない、ということ、簡単に言えばこういうことだ。これらのことは時代に関係なく事実である。

”権力への意志”、これは現代流に言えば、複雑系での自己組織化などの挙動の原理、現象や、宇宙の発現と構造化、素粒子、原子、分子、高分子、生体高分子の発現、つまり存在物の斯様な存在化の全体の地平の展開を別様に表現しているものである。空間の発現、、、。

私は、高度に、高次元で存在が包括していること、このような構図のなかに存在物として、存在せしめられているところの存在物の世界構造のもとでの階層的存在の在り様、または次元の包括性の在り様、どうすることもできないこの存在というもとの仕組みを強度にみても、そのことを権力とよんでいるのではないかと考える。存在が顕現する存在物は、その存在の地平・構図のもとで次元的に階層づけられている。その関連性、その包括性を指して言っているのではないか。

だから検証に裏付けられた現代流の認識と対比すると非常に荒削りである。がしかし直観により本質を突いているところがある。まずそもそも認識、直観、概念、・・・とは何なのかということに対して、根底からの見直しが緊急のこととしている。

永劫回帰は今風に言えば、エキピロティック宇宙論になる、ニーチェはそれをエネルギー保存則を根拠にしている。また”私は力の基体としての絶対空間を信じる”とあるが、今風に言えば量子真空を示唆しているようにも思える。

現在の自然科学の成果は、ニーチェの時代とは比較にならない程に進展している。そのため、ニーチェの自然論には時代遅れの感は否めないが、認識に関する本質的な面においては未だ精彩を欠いてはいない。鋭く突いている。

新しい価値定立の原理。

I。 認識としての権力への意志。

L)。 認識の生物学的価値

590

私たちの価値は事物のうちへと解釈し入れられている。いったいそれ自体でのものうちに意味があるのだろうか？

意味は必然的にまさに、関係の意味であり、遠近法であるのではなからうか？

すべての意味は権力への意味である。(すべての関係の意味は権力の意志のうちへと解消されてしまう)

<--- 私が考える「情報」に対する概念と、似ている部分はある。

m) 科学

600

世界は無限に解釈可能である。あらゆる解釈が生長の症候であるか没落の症候であるかである。

統一(一元論)は惰性の欲求であり、解釈の多様性こそ力の象徴である。

世界の不安定な謎めいた性格を否認しようと欲してはならない。

<--- 世界定位の体系化への批判であろう。例えば現代物理でのAdS/CFT対応は、或る現象を様々な次元から解釈し、創発的な概念から行っているのは面白い。

10-022

実存に関して。

- ・実存とは、有と無の問題が生起する次元において、存在驚愕により、存在覚醒したことを自覚した主体である。よって構造が顕現する以前の圏域、次元を意識しており、既に構造という次元情報を超えたところの住人である。
- ・実存は顕現した世界を、次元が相転移しその相転移欠陥の構造情報体とみる。構造化は次元という包摂的情報の凝縮とみる。それゆえ、実存は歴史の実存であり、超次元的実存であり、脱価値的存在であり、包摂意識的存在である。
- ・実存は存在と無の圏域に参入し有の有様を受入れその構造を意識的に超越できるものである。実存は有化した諸々の構造そのものよりも、有と無の圏域に関わりそれを超越する。実存にとって、どう有るかが問題なのではなく、何故有るかの問題を重視する。

- ・実存は、あたかもこの次元に迷い込んだ自由である。
 α 次元から $\alpha-n$ 次元を俯瞰しているが如き自由である。
 $\alpha-n$ 次元のこの世界は、 α 次元からの次元落ちした世界であり、 $\alpha-n$ 世界はあたかも幻のごとき実体のない情報世界のごときに写る、 α 世界の鏡映世界、射影世界のごときものなり。
 実存は α 、 $\alpha-n$ 間を俯瞰し得る。つまり超越し得る。

- ・実存、それは時空を超え、次元を超えた、あるできごとである。
 自由そのものである。愛を超えた愛である。
 定常的周期的概念、因習、慣習、固執的、定着的概念から元々自由に解放されている。

- ・実存は無に浮かぶ、有の次元相転移体または、次元相転移イベント、次元相転移構造体の如きものである。
 何故に、無から有が生ずるのか。量子ゆらぎのトンネル効果だと言うが……

有がなければ認識されることがないから。

↓

認識されることのない有とは一体何なのか。

有は存在を認識されるのを待っているのだろうか。しかし、有は対自たり得ない。
 主観、客観の分裂、意識の対称性の破れがあり、包括的存在のもつ、二極性—対称性と見えるものの一側面。

- ・実存は、存在があらゆる想像出来得る限りの次元、概念を超えて絶対的、無限、永遠性を保持していることを見出していること、及び有と無の次元、存在と存在物の次元の差異域に足を踏み込んでいることに対して人間的位階を自覚している。
- ・実存は存在自体が如何様にあるかより、何故にあるかを一次的問題とする。
 最も近いものであると同時に、もっとも不可思議なもの、最も驚くべきものであるこの存在驚愕を実感し、そしてこの奇跡の中で自己が生かされているというそのことに無上の悦びを感じているのである。
- ・実存は存在自体を既に知られている概念で説明できるとは考えない。
 人間の理性、悟性、概念をはるかに超えている次元が現出、顕現しているというその驚くべき事実の中に組み込まれていることに驚愕を覚え、そして自己を見失うことなく眼を見開いて挫折することをよしとして意識しており、ただ「ある」、「共在」していることだけで満足しているのである。
- ・実存は理性、悟性を包摂する。実存なくして理性、悟性は意味をもち得ない。地盤を失うものである。人間存在は理性、悟性による構造情報を追い求めるが、実存は構造以前の有無の圏域に住まう。理性と悟性による構造情報の認識の難破を実存は既に予想しており、むしろそれが出発点になっている。実存は、顕現化した構造化情報よりも、顕現以前、顕現と未顕現の圏域を先取りする。実存は悟性、理性による構造認識(科学的成果)によって、そのことの確認を、地歩を固めてゆき、包摂し、昇華してゆく。
- ・実存には存在そのものが貫通しており、貫通していることを意識している。
 実存は、自己の絶対的自由性を常に意識している。
 常に、自己に存在が刻印されている、絶対的時空超越体であることを意識している。
 無限と永遠が凝縮された、ある唯一無二の出来事である。
 有がたとえ幻であったとしても、実存は唯一無二の絶対性を帯びている。
 実存は唯一無二を常に自覚している。唯一無二は実存の基盤である。

- ・実存は、己を存在の充溢、存在の凝縮そのものであることを意識している。
孤の中に、共在、溢れる共在感覚を持っている。
時間を越えた、価値観を超えた絶対的唯一性、絶対的存在性である。
- ・宇宙的な存在覚醒を持って生きることである。
常に意識の焦点をそこに合わせていることが肝要である。その為に生きている。
肝心なのは宇宙的意識を持って生きることである。
宇宙的視野で考えることである。宇宙的視野で有と無の圏域を視入ることである。
そこで初めて地上における唯一無二の絶対的価値を見出すことができる。
つまり至上なる宇宙的価値を見出すことができる。
- ・実存は、時間の中にあつて時間を超え、空間の中にあつて空間を超え、歴史の中にあつて歴史を超え、概念の中にあつて概念を超え、斯様に無限の包摂と無限の思惟空間の中で自己を持っている。
- ・生とは実存意識をもって生きることである。それ以外は二次的なものである。
存在を一から問う為、存在を意識していることの為に生の意味があるとみている。
そして更に、なにになにの為にという目的性はそもそも無い。
- ・概念は構造により制約された縛りから抜け出すことは出来ない。実存はその縛りが有ることを意識できるものである。
実存は、想像でき得る、概念化でき得る極限まで包括しようと意識する。
実存は、現存在的価値から距離を置き、現存在的視点を超え可能な限り最大の包摂的概念を追求する。
- ・実存とは、個が即 宇宙、存在に直結するのである。そこには局所的なもの、ことは排除されている。
実存は全てを白紙に戻す迫力を持っており根源的に価値観というものを初期化し再構築を可能にする。
- ・この人間という摩訶不思議な生命、現存在。現存在間の価値観、交通性、既成概念、因習、歴史、を超えた次元に常に意識の焦点を合わせていない限り現存在を定位できない。
実存はそういう相対的価値から飛翔する。
- ・実存はあらゆる思惟に純粋に無色な関与をする。
時間の中にあつて時間を意識しない。瞬間の中に永遠を見ている。
現存在のすべての価値基準、価値判断、価値評価とは無縁である。
比較、価値、標準からは逸脱しており、無縁である。
動も静も見えていない、存在が浸透した無限な至高な予感の凝縮体を見る。
あらゆる擾乱から独立している。それらには関与しない。それらの領域との接点を持たない。
- ・実存は、この有様をそのまま受入れる。有り様を問わない。
斯様に有ることに満足しており、至高なるものに充足している。
全てを受容するが故に求めることがない。今のあるがままを受容する。その中で充足している。
常に満ち足りた満足感の中で、無限の至高性を感じている。
言うなれば、考え得る最高の価値をその時々、瞬間に体得していることを意識している。
実存は、有のこの構造地平の中に存在していることに無上の悦びを感じており、無限の価値を意識している。
- ・実存は、力の視点、権力の視点の世界から、世界とは関与しない。
騒音、喧騒の中に静を見ている。瞬間の静寂の中で充足している。
量の世界とは対極にある。実存は、過不足、計量とは無縁である。
- ・塵ひとつ、誰も見向きもしない塵一つ、水滴一つに無限なる至上なる宇宙的な唯一絶対的価値を見出す。
歴史的絶対性としての実存、そのことの為に生きているのである。
現存在に与えられた感覚器官、センサーはそれを感得するに充分すぎるほどである。あり余るほどである。
- ・私は永遠を生きている。宇宙的な絶対的価値そのものの中に生きている。
実存の絶対性、絶対的価値性、永遠性は失われることはない。
そのことを識るため、実感するために生きている。
- ・実存以外は虚妄、幻想、幻影の世界である。実存に至る道である。
実存に至るまでの概念は、実存に至ると包摂される。

10-023

存在と空間と実存

我々は空間以外に存在物が存在する背景あるいは存在物が排他的に占有する概念としての容れものを知らない。存在の圏域としての空間ではあるがその実体、本質は知らない。存在物が存在するには不可欠な絶対的条件としての空間とは、そもそも何なのか。

最近のトポロジー弦理論により空間に対する今までの概念は大幅な変更を受けるだろうが、存在との関係に関しては更なる謎を呼ぶのは間違いないことだろう。

幾何やトポロジーは空間の存在物としての特性を示しているのであって、存在との関係における本質を示しているわけではない。超弦理論、量子重力、超重力、幾何、トポロジー弦理論・・・などの枠での空間の探求は存在と存在物との本質的な核心の意味を示しているわけではない。

ただ言えることは、

- ・存在物が存在する、と想定する場合、無意識に空間の中に存在すると非自明的に思っているということである。これは人類史的な或る獲得形質を示しているのかも知れない。
自然科学も幾何学も全ては存在物に対してHOWの探求であってWHYに答えるものではない。
- ・根本的に概念として崩壊しているのは、空間があるところが存在があるところだということ、存在に関しても空間の概念が浸み込んでいることだろう。

存在は、そういう圏域的、領域的、つまり境界概念が入り込む空間的なものではないからだ。その圏域外、領域外、境界外がある(存在する)とすることは、矛盾しているからだ。

Space ∈ Existence (Raum ∈ Sein)

空間をいろんなモデルで創発するものとして現代物理は考えているが、(例えばループ量子重力、行列模型など) 存在との関係から言って、それはあくまで空間を存在物化(多様体)している枠内でのことである。

- ・ヤスパースのように、これは超えられない超越者の暗号だと見なすこともできよう。あるいは知、概念、悟性の限界と見なすことも出来るだろう。ハイデggerの場合は、「存在と時間」と言った場合の存在は空間概念を想定していることが解る。だから「存在と時間」と言った場合は、「空間と時間」と言い換えられるし、その時点では、フッサール流に現象学的な枠内で探求していたことが解る。「世界—内—存在」の造語にも顕れている。存在に境界概念、トポロジー概念である「内」という概念は存在的には矛盾している。
- ・もともと時間という概念も空間という概念が基礎にある。そして存在という概念も空間と密接な関係にある。
- ・空間を幾何やトポロジーのようにHOWで捉えるのではなく、或る直観的に存在との関係性の下で捉える必要がある。
- ・存在物である我々人間は、共存する存在物と関わらなければならない次元的宿命を負ってはいるが、そのことを意識していることが肝要である。
- ・人間世界は、自己保存、権力志向、比較、優劣、階層性、利得、利用、策略、競争、迷信、自己欺瞞、・・・等々、生物学的生存競争から本質的には逸脱していない世界である。常にそれらに振り回されている世界である。その歴史の連続である。そこには必要最小限に関わることで済めばそれに越したことはない。
存在を意識できない世界、それは果てしない不毛の世界であり、徒勞の世界であるからだ。
ただ、そこに存在と創造のダイナミクスな芸術性を求める場合は別ではあるが。
それらの因習、伝統つまり固定化した世界概念から飛翔しなければ人間は生存の意味、存在の意味世界の意味を感じることはできない。
- ・あたかも人間は既に知られたものという暗黙の共通認識があるかのような風潮があるが、本質的にも構造的にも全く同定できない未知のものである。人間特有の意識と認識形式、次元で自己を同定しているだけで、存在との関係においても何一つ明確なことがないのである。
世界に被投されている存在物は被投している存在との関連性、意味合いが解らなければ何一つ解ったことにはならないのである。

10-045

哲学とは行為である。

存在の深淵を覗き、その超越性に眩暈を経験した者は、世界を今までとは異なる観点から観る。

ヤスパースは、存在は不可思惟性として思惟の限界として、超越性として止揚し、むしろ実存への覚醒の契機とする。ハイデッガーは、存在とは何かを執拗に追求したというイメージを受ける。どちらも人生の晩年の著作において本骨頂が表れている。その情熱は晩年においても衰えることがなくむしろ更に思想が鮮明になっているという印象を受ける。

存在、この大いなる疑問符。

たとえ今後何世紀も経って、世界定位に関する認識が進み、より包括的概念の下に世界が定位され解釈され、理論モデルも一般化され、より抽象性の高い概念の中に包摂されていくであろうが、世界の概念がより高い抽象性に収斂していても、本質的に世界を知ることにはならないだろう。

存在と存在物との峻別としての概念の地平は消えることはない。

存在のこの根本構造、形式は変わらない。

常に、最も喫緊で、具体的で、且つ最大の疑問として依然として残るのである。

存在とは何か？ 何故、存在が在るのか？

個人的な思索の中で慎重に、且つ大胆に、そして深く静かに、その解説は為されていくであろう。

衝撃的な、この存在の様式、形式、地平は、どこまでも残り、我々は実存をしてそれらを昇華し、享受するほかはない。というよりも、そうすることに無上の充足と喜びをえるのである。

人間にとって重要なのは、思惟の視点である。、思惟の次元である。人間の位階はそれで決まる。

因習的な思考、形式は常に突破してゆかなければならない。宇宙的視野、存在と存在物の区別からの視野、脱人間的な視野から主観—客観—分裂の世界を包越し超越する包括的視野をもって実存を生きることが何よりも肝要である。

そこに己の存在の意味がある。そこを捉えておけば、眼前の世界は己の自由な舞台である。

すべてが歓喜し、創造のよろこびのなかで舞っている。

人間にとってすべてが芸術であり、美であり、想像を絶した絶妙な、存在の無媒介の圧倒的な直接性であるところの現実である。

眼前の永遠性としての具体性を生きるのである。

圧倒的な存在の覚醒、存在の全宇宙的—即時性、無媒介の圧倒的直接性、すべてが徹頭徹尾存在地平の許でのことである、この圧倒的な現実性の経験。

すべての存在物が永遠の相である存在の許で、存在を意識する、つまり存在の自己—意識をもって自己—完結するというなかに居る、というそのことの現実の覚知。

この存在の圧倒的な直接性としての現実態を見なければ、何一つ見たことにはならない。

そこには存在の歴史が展開している。存在の時性が脈打っている。

そこに既に参画していることのうちに存在している意味が成就されている。

存在の地平自体に時性はない。存在の存在化つまり存在の自己展開、自己双対としての生成に時性がある。そして存在の地平は言葉の極限の意味で永遠そのものである。

存在化における凝縮、固有价值化において存在物が顕現し、物理的定数、構造が凝縮化する。

世界展開はこのようにして生起する。存在に、数、量は無関係であるため、これらの生起は無限に起っている。我々はその凝縮相の一つの”閉じ込め相”に固有价值化されている存在である。

相境界が生成されているため、その境界によって”閉じ込め”的様相を呈している。

哲学とは行為である。存在—覚知という行為である。

今、まさに、ここに於いて、眼前に圧倒的な直接性としての存在を存在物のなかに具体的に覚知するのである。絶対的—即時—存在を眼前に見るのである。直接的—即時的、関係にある現実としての世界と己を共在する存在物のなかに見るのである。

圧倒的な直接性として存在が領しているなかで存在して居ることを見る以上に喫緊で重要なことはない。そして存在を意識することほどに重要なことは存在するものにはあり得ないのである。

だが、我々はその存在を探求することはできない。探求することができるのは、存在しているもの、共在している存在物の世界を相互規定的、自己回帰的、自己循環性としての解釈の世界においてのみ、探求、研究が可能なのである。

我々は何を見ているか？

比較することができない一意性としての絶対—存在を見ているのである。

それは、存在の完全性を見ているのである。存在の自己展開を見ているのである。

存在という奇跡を目の当たりにしているのである。

そこには存在の許における具体性としての完璧、完全、無矛盾が現成しているのであり、我々はそれを見ているのである。

存在しているものは、完璧な完全性であるということ、でなければ存在しないということを知るのである。

10-046

存在の自己無矛盾としての完全性、完璧性。

自然科学の探求の過程は、自然である我々による自己認識、自己言及である。そしてその自然は無数にある、あるいはむしろ、存在的に数、量が意味をなさないところの無数の真空のランドスケープの中の一つの宇宙の仕組みの探求である。

その対象は、真空(将来において概念的に異なったとしても似たようなもの、同相的なものだろう)の無限多体系の或る一つの”閉じ込め相”である宇宙の下での理法を概念と測定によって探求する、自己回帰的循環的な相互規定による探求である。

存在は存在物が在って己の意味を成す。存在物は存在の自己双対である。そして存在物は存在が自己言及し、存在が意味を成し自己完結する基盤であり、存在により生成を駆動されているものである。時というものはそれを呼称したものである。

存在物はそのなかで捉えられるものであり、根源的にはそれらは定義、定位不能のものである。

存在がそうであるように不可思惟性としての限界がそこにはある。

概念による相互規定的、自己回帰的、自己循環によって定位できる限界を超えたところにある。

概念化して定位するのが我々人間の認識の方式である。それは人間的に相転移、凝縮した変容、偏向した共有、共用としての言葉による定位である。そしてそれは定義することによりそれを固定化する。

我々は何一つとして、完全に定位、定義できるものはない。

世界は数学的に表象され得る面を有している、というだけのことである。

概念による世界定位を行う自然科学は永久に自己循環的、自己完結的に行ってゆくのである。

だが、存在の自己無矛盾、存在の唯一無二性としての形式から、すべて在るもの、在ることは完全性、完璧性として顕れている。

実存は、既に完全性、完璧性が、今、ここに顕れて在ることを覚知している状態のなかに居る。